

日本音楽集団

PRO MUSICA NIPPONIA



第178回定期演奏会
The 178th Regular Concert

新しい音を探る

Vol.2

Researching for New Sound
Vol.2

2005年1月25日[火]
午後7時開演(午後6時30分開場)
津田ホール



企画・構成=吉村七重

：主催：特定非営利活動法人日本音楽集団
：助成：平成16年度文化庁芸術団体重点支援事業・(社)私的録音補償金管理協会(sarah)
■日本音楽集団：<http://www.promusica.or.jp/> <http://www.wahoo-net.com/promusica/>
E-mail office@promusica.or.jp





逍遙 ～日本楽器のための (1973年)/入野義朗作曲

IRINO Yoshiro : Syōyō for Japanese instruments

[笛] 竹井誠 [尺八] I原郷隆 II渡辺淳
 [細棹三味線] 山崎千鶴子 [太棹三味線] 工藤哲子 [琵琶] 田原順子
 [箏] I田村法子 II三宅礼子 [十七絃] 久本桂子
 [打楽器] 望月太喜之丞・多田恵子
 [指揮] 板倉康明(客演)

音響的調和。それは異なる楽器のアンサンブルのために書かれたこの作品において、響きの雲の如く漂う同音色の動きの組成とその構成から受ける印象である。

楽器群によって様々に変化するニュアンスさえも、雲を構成する一つの要素として機能し、そこでは例えば線による対位的関係というよりも、音色として均質化された美しさがある。それはもしかしたら、入野流の12音技法と、音の均衡ということが、いずれかのレベルで照応するのかも知れない。

1973年、第20回定期演奏会で委嘱初演された。

(田村文生)

入野義朗 いりの・よしろう(1921-80)

ウラジオストク生まれ。東京帝国大学(現東京大学)在学中に諸井三郎に師事。1946年柴田南雄とグループ〈新声会〉を結成。日本における十二音の先駆者。桐朋学園音楽科設立・運営に参加。日本現代音楽協会、日本作曲家協会の委員長等諸役員を歴任。軽井沢現代音楽祭等の現代音楽祭を多数企画し、常に新しい音楽の追求と紹介を行なう。アジアの作曲家の相互理解を深める為にアジア作曲家連名(ACL)を設立。

日本で最初の12音技法による作品「七つの楽器のための室内協奏曲」(1951)をはじめ、ザルツブルクオペラ大賞のTVオペラ「綾の鼓」、文楽オペラ「曾根崎心中」、「Stroemung」、「Globus III」、邦楽器の四重奏曲「四大」等100曲余の作品、他に校歌/社歌、ラジオ/TV/芝居の音楽、音楽理論の翻訳書、教材等多くの作品や著書を残す。

毎日音楽賞、尾高賞、イタリア賞等受賞。没後国際作曲賞「入野賞」が禮子夫人により設立され、アジアの作曲家の為に「ACL入野義朗記念作曲賞」も設立される。



秘水変幻 ～横笛と二十絃箏のための (2003年)/西村朗作曲

NISHIMURA Akira : Hisui-Hengen for yokobue and 20 string koto

[笛] 西川浩平 [二十絃箏] 吉村七重

この曲中において奏する横笛は四種。篠笛(三本調子)、龍笛、能管、篠笛(十本調子)である。横笛が表現するのは、見えざる霊的な生命体。それは蝶のようでも、鳥のようでも、蛇のようでも、人のようでもある。横笛の種類が変わるにつれ、表象の有様も変化する。音楽的、旋律的には、篠笛から能管に向かって「抽象化」が進み、生命体の外皮が破れ内臓が露呈するような様態となる。そして最後の高い調子の篠笛は、命の、悲しい外皮をまとった再生を表現する。一方、二十絃箏は、秘密の水をたたえた泉である、その水が、横笛の生命体を生かし、変容させる。神秘の霊泉はみずからの内なる熱と力によって、沸き立ち、噴出し、静まり、波立つ。横笛という生命体が、赤い舌をチロチロとのぼして、二十絃箏の秘水を飲み変幻するといったイメージがまずあって、それが作曲をうながした。いささか異様なイメージである。

(2003年度紀尾井ホール委嘱作品 初演プログラムより作曲者)

西村朗 にしむら・あきら(1953-)

大阪市に生まれる。1973～80年、東京芸術大学及び同大学院に学ぶ。

日本音楽コンクール作曲部門第1位(1974)、エリザベート国際音楽コンクール作曲部門大賞(1977・ブリュッセル)、ルイジ・ダルッラピッコラ作曲賞(1977・ミラノ)、尾高賞(1988・1992・1993)、中島健蔵音楽賞(1990)、京都音楽賞[実践部門賞](1991)、日本現代芸術振興賞(1994)、エクソンモービル音楽賞(2001)等を受賞。

現在、東京音楽大学教授、(社)日本作曲家協議会理事の他、2000年大阪いづみホールのレジデントオーケストラ、いづみシンフォニエッタ大阪の音楽監修を務めている。



TAMAS III (1998年)/ジョルジオ・マニャネンシ作曲 (日本音楽集団40周年記念作曲コンクール第二位受賞作品)

Giorgio Magnanensi : TAMAS III

(2nd Prize of Pro Musica Nipponia the 40th anniversary composition competition)

[三味線] 杵家七三

[打楽器] 望月太喜之丞・多田恵子・盧慶順・細谷一郎(助演)・島村聖香(助演)

[指揮] 板倉康明(客演)

この作品は、1998年の春、私が東京に滞在中、杵屋五三吉氏のために作曲しました。

日本の音楽文化との出会いは、私に多大なる興味と重要性をもたらしました。そのような非常に異なる文化として私の内面に届いた音楽的・芸術的経験との出会いは、私の音楽に対する態度を何らかの形で再定義するものでした。それは「差異」ということの本来の意味を外面的・内的に見出すことに、私の意識の照準を合わせるための力というものが、私の日本での体験によってもたらされたということになります。作曲する(compose)という言葉は、“cum-ponere”というラテン語を語源とし、我々が芸術的な意味で様々な経験をしているような、「物事を配置する」、「関係を創造する」、「聴く」、「より高い次元での共有を我々に聞かめしむ」という意味を持ち、作品は、決して閉じた、完成したものではなく、その到着点はまた、新しい出発点でもあります。

TAMAS IIIは、音楽のコミュニケーションは、純粹に感情的なレベルにおいて存在する、情動性というものには内発的であり、表現は瞬間と結びつき、瞬間は、予想不可に超絶的である、というような私の音楽の実践の過程に対する意識の、小さいながらも重く、私の実践に適切な概念を定義する際の重要な一歩でもあります。

今回、日本音楽集団作曲コンクールにおいて第2位を頂き、大変喜ばしく思うと共に、指揮者、演奏者の皆様方に、深く感謝申し上げたいと思います。
(ジョルジオ・マニャネンシ)

Giorgio Magnanensi ジョルジオ・マニャネンシ(1960-)

イタリア出身。80年代初頭よりヨーロッパ、日本、カナダなどで活動し、作曲、指揮、即興演奏やビデオ・アートなどを手がけている。現在ヴァンクーヴァー在住。ヴァンクーヴァー・ニューミュージック・アンサンブル芸術監督、ブリティッシュ・コロンビア大学音楽学部、ヴァンクーヴァー・コミュニティー・カレッジ各講師



休憩



火の曲 (2004年)/四反田素幸作曲 (日本音楽集団40周年記念作曲コンクール第一位・団員賞受賞作品)

SHITANDA Motoyuki : Fire-music

(1st Prize and PMN Member Prize of Pro Musica Nipponia the 40th anniversary composition competition)

[笛] I 竹井誠 II 西川浩平

[箏] I 吉村七重 II 早川智子 III 桜井智永 IV 山田由紀

[十七絃] I 宮越圭子 II 城ヶ崎美保

[打楽器] 望月太喜之丞・細谷一郎(助演)

[指揮] 板倉康明(客演)

古来より儀式や祭礼などにおいては、火は神聖なるものの象徴的意味合いを持って用いられてきた。オリンピックの聖火などはその典型であろうが、私がこの作品で意図したことは、ゆらゆらと静かに、あるいは激しく燃え盛る炎によって呼び起こされる様々な情感の揺らぎ、即ち時に祈りのような純化した平穏な心の状態であり、また時にはデモーニッシュでさえあるような躍動する心象風景を、儀式的に演出された演奏空間の中に描き出すことであった。故に舞台上の楽器配置(笛を中心として、両サイドに箏群が広がっていく配置)は、音響的な理由に加えて、その意図を視覚的にも反映させようと試みたものである。
(四反田素幸)

四反田素幸 したんだ・もとゆき(1952-)

大阪生まれ。東京藝術大学卒業。在学中に石桁眞禮生、黛敏郎、浦田健次郎らに師事。1980年から1985年まで石桁門下で結成された作曲家の会「環」に所属。その後、現在に至るまで日本作曲家協議会会員として活動。2001年から2002年まで文部科学省在外研究員(トリニティ音楽大学客員研究教授)として英国に留学。留学中もパーミンガムその他の都市で作品の発表を行った。現在秋田大学教授。これまでに文化庁舞台芸術創作奨励特別賞、笹川賞、奏楽堂日本歌曲コンクール作曲部門第2位、秋田県芸術選奨などを受賞。作品は文化庁芸術祭主催公演や所属する日本作曲家協議会コンサートなどで演奏され、またNHK-FM「現代の音楽」などでも紹介されている。



五

セレモニアル・スペース (2001年)/一柳慧作曲

ICHIYANAGI Toshi : Ceremonial Space

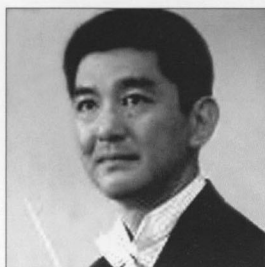
[笛] 竹井誠 [笙] 真鍋尚之 [箏] 西原祐二 [尺八] 加藤秀和
[十三絃箏] 久東寿子 [二十絃箏] 山田明美 [打楽器] 多田恵子

第165回定期演奏会(2001年)で委嘱され初演されたこの作品は、雅楽と邦楽の混成した楽器編成と、中でも楽器の組み合わせによって明確に区分された、非常にシンプルな構成を持つ。

打物・笙・尺八によって紡ぎ出される「空気」、「線」や「点」、箏と竜笛によって規定される「場」、そしてそれらに箏と尺八があたかも衆会するが如く呼応するが、静的なもの、動的なもの、或いは場所とそこに参会する者との接合点を捜し求めているが如く響く。(田村文生)

一柳慧 いちやなぎ・とし(1933-)

作曲家・ピアニスト。神戸生まれ。10代に二度毎日音楽コンクール(現日本音楽コンクール)作曲部門で第一位受賞。19歳で渡米、ニューヨークでジョン・ケージらと実験的音楽活動を展開し、1961年に帰国。偶然性の導入や図形楽譜を用いた作品で、さまざまな分野に強い影響を与える。これまでに尾高賞4回、フランス文化勲章、毎日芸術賞、京都音楽大賞、サントリー音楽賞、紫綬褒章など受賞多数。作品は文化庁委嘱のオペラ「モモ」(1995)や、新国立劇場委嘱のオペラ「光」(2003)、6曲の交響曲、多くの室内楽作品の他、「往還楽」、「雲の岸、風の根」、「邂逅」などの雅楽、声明を中心とした大型の伝統音楽など多岐にわたっており、音楽の空間性を追求した独自の作風による作品を発表し続けている。作品は国内のオーケストラはもとより、フランス・ナショナル、イギリス・BBC、スイス・トーンハレ、ノルウェー・オスロフィルなどにより世界各国で演奏されている。現在、財団法人神奈川芸術文化財団芸術総監督。また、2006年2月初演予定の3作目のグランド・オペラ「愛の白夜」台本:辻井喬、演出:白井晃を作曲中。



プロフィール

板倉康明 いたくら・やすあき(指揮)

1960年東京生まれ、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て東京藝術大学音楽学部卒業。フランス政府給費留学生として渡仏し、パリ市立音楽院、パリ国立高等音楽院を卒業。音楽全般を故アンリエット・ピュイグ-ロジェ氏に師事。指揮者として活発に活動し、サントリーサマーフェスティバル、アジア音楽週間2000、スペインのアリカンテ音楽祭、コンボージアム2003、シュライヤーン音楽祭等、国内外を問わず、特に現代音楽の分野において、その精緻で知的な解釈が内外の作曲家、批評家達より好評を受けている。現在、東京シンフォニエッタ音楽監督。中島健蔵賞、第66回、68回日本音楽コンクール委員会特別賞を受賞。

ご挨拶

吉村七重

新しい音を探るシリーズの2回目は、日本の代表的な3人の作曲家の作品と日本音楽集団40周年記念作曲コンクール入賞作品を演奏いたします。故入野義朗氏1973年の新しい試み「逍遙」、コンクールの審査員を務めていただいた西村朗氏の「秘水変幻」、コンクール入賞者へのお祝いの意味を込めて、一柳慧氏「セレモニアルスペース」の5曲で構成いたしました。

20年ほど前からでしょうか、作曲家には伝統的音楽観にとらわれず自由に作品を作る方たちがおられました。しかし、演奏となるとまだまだ無意識に伝統に縛られる面があったのが、演奏もまたそこから自由になりつつあるようです。

コンクールを終えて、日本の楽器演奏も新しい段階に入っているように感じました。

邦楽器の演奏家が伝統から自由になった後、日本の文化としてどのように再構築していくのがこれから問われることになるのだらうと思います。

その問題を考えながら、また新しい音を探っていきたく願っております。

「日本音楽集団40周年記念作曲コンクール」審査を終えて

2004年度委嘱審査員 西村 朗

このたびは日本音楽集団のこのような重要な作曲コンクールの審査員を、代表の田村拓男氏とともにつとめさせていただきましたこと、大変光栄に存じております。世界13カ国より46作もの応募があり、質の高い作品が多かったことにまずとても驚きました。これは日本音楽集団の御活動が世界的に注目され、高く評価されていることの明らかな証左であり、また同時に内外の広い世代が、日本の伝統楽器や伝統文化に積極的な関心を寄せていることを示したものと申せましょう。こうした国際的な規模での邦楽器のための作曲コンクールは大変希少であり、その審査員を勤めさせていただきましたことは私にとり、まことに貴重な体験であり、大いに勉強にもなりました。しかし正直に言って、作曲審査員として未経験のジャンルであり、予選の譜面審査は本当に神経がすりへる思いで、へとへとになりました。

本選会で演奏された7作品は、どれが入賞曲となっても不思議ではないほどに、個性的な魅力に富むものばかりでした。

成田和子さんの「夕霧が そっと おおったのは」は、美しい作品で、特別な抒情味をそなえ、楽器用法も洗練されて、多彩な音色の絡みが印象的でした。山本良子さんの「反閨～榊鬼様の舞」は、能管と鼓という楽器限定の上で、能の持つ動的な魅力、声を含む音楽の妙味を見事に作品化したもので、実際の舞の曲としても価値の高い佳品と言えるでしょう。カナダ在住イタリア人作曲家のG・マニャネンシさんの「TAMAS III」は、まず楽譜を見た時に驚きました。実に精妙な記譜法。三味線についての深い知識と理解にたつての緻密にして大胆な楽想の展開。さすがに、国際的評価の高い実績を持つ作曲家だけのことはあると感服しました。後藤真希子さんの「青魄」も個性的な魅力耀く力作でした。多彩な楽器編成で、邦楽器群による響きの万華鏡が生み出され、一種魅惑的な音響カオスに酔いました。四反田素幸さんの「火の曲」は、完成度の高い名作と言えるでしょう。自然体にして深みと躍動感のある楽想、効果的な楽器法、堂々とした構成。熱い感銘を受けました。これは今後、日本音楽集団の重要なレパートリーのひとつとなるに違いありません。成本理香さんの「〈小町少将道行〉によるパラフレーズ」は、ユニークな着想と構成による新鮮な作品で、三味線四重奏という楽器選択にも魅力があり、楽器の使用法にも妙味が感じられました。最後に演奏された菅野茂さんの「Hogaku II WVE-222」は従来の伝統音楽観に一切とらわれず、自由にして大胆な着想で、邦楽器や演奏家を扱い、特殊な発音や発声をまじえた独特の世界を提示。ユーモラスな面もあって楽しめました。

演奏はいずれも素晴らしいもので、団員の方々の力量の高さをあらためて認識いたしました。

このような有意義にして実りの大きい御企画が、発展的に継続なされますことを願ってやみません。

日本音楽集団40周年記念作曲コンクール

本選会演奏作品

- 一、成田 和子 / 夕霧が そっと おおったのは
- 二、山本 良子 / 反閨～榊鬼様の舞 (へんばい～さきさまのまい)
- 三、Giorgio Magnanensi / TAMAS III 第二位受賞
- 四、後藤 真希子 / 青魄 (しょうはく)
- 五、四反田 素幸 / 火の曲 第一位・団員賞受賞
- 六、成本 理香 / 「小町少将道行」によるパラフレーズ
- 七、菅野 茂 / Hogaku II WVE-222

賛助会員へのお誘い

1999年10月、特定非営利活動法人日本音楽集団が発足したのを契機に、賛助会員を募集しています。多くの方々からの支援を仰ぎ、息の長い活動を目指したく、ご協力お願い申し上げます。 募集の詳細はチラシをご参照ください。

【賛助会員五十音順】

法人 (株)全音楽譜出版社 (株)宮本卯之助商店 NPOTリトン・アーツ・ネットワーク	個人 青柳 克 堯 新井 塚 輔 飯塚 吉 子 飯吉 正 山 伊藤 美 恵 子 今村 厚 子 大江 西 緑 大関 富 枝	太田 颯 衣 川壁 彰 正 岸藤 陽 則 後反 田 子 四白 水 幸 杉田 昭 彦 関厚 和 繁 雄	手塚 愛 子 土井 惠 見 藤山 雅 弘 中島 雅 靖 浜田 靖 子 古川 羽 子 本野 正 山 水野 正 実 徳	森 玲 子 渡 辺 京 子 渡 辺 邦 治 渡 辺 治 子 Andrew MacGregor
--	--	---	---	--

特定非営利活動法人

日本音楽集団

〒151-0073 東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302 TEL03-3378-4741 FAX03-3376-2033
ホームページURL <http://www.promusica.or.jp/> E-Mail office@promusica.or.jp

団員のコンクール受賞のお知らせ

昨年行われた東京・邦楽コンクール(現代邦楽研究所10周年記念事業)で笙の真鍋尚之が第一位、また、第11回賢順記念全国箏曲祭全国箏曲コンクール・賢順賞を田村法子が受賞しました。

2005年度日本音楽集団団員募集オーディション

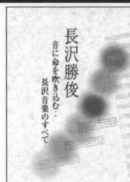
2005年3月9日(水)

詳細は事務局へお問合せください。Tel 03-3378-4741

2004年11月26日刊行!

長沢勝俊

音に命を吹き込む..
長沢音楽のすべて



日本音楽集団の西川浩平、水川寿也、宮越圭子の対話者が、“長沢ブシ”の魅力を訪ね、長沢勝俊の音楽人生について語る。

長沢と共に歩んだ方々の貴重なメッセージを収録。また、作品年表も掲載。 A5判 定価700円

箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追究した箏

十七絃箏

二十絃箏

二十五絃箏



時を超え心に残る音づくり

有限会社 琴光堂

〒152-0003 東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL03(3792) 8481 FAX03(3792) 8437
E-mail: tokyo@kinko-do.com